

# TSPI 性格テストの作成

財団法人 日本体育協会  
東京オリンピック選手強化対策本部  
スポーツ科学研究委員会



# TSPI 性格テストの作成

## — 目 次 —

序	3
1. 研究経過	3
2. 尺度の構成	4
3. 標準化	4
(1) 被検者	
(2) 標準点	
(3) 妥当性	
4. 実施結果	5
(1) 男子一般と運動部の比較	
※女子(同上)	
(2) 男子一般と各運動種目との比較	

主な研究協力者	松井三雄・杉本功介(日大)
	松田岩男・近藤允夫(教育大)
	太田哲男・加賀秀夫(順天堂大)
	飯田颯男(都立両国高校)
	大川信明(日本リサーチセンター)
	直明弘章(早大)
	平田久雄(東大)



## 序 研究のねらい

運動選手のコーチにあたって、その選手の身体的特性のみならず精神的特性あるいは性格特性について理解し、それらに即してトレーニングの方法をくふうし、実践することが必要であることはいうまでもない。自分の経験に基づいて、有効であると考えて叱つた場合でも、ある選手には、強い刺激になり、練習意欲を高め、技術の習得に役立つ場合もあるが、ある選手には、刺激が強すぎて、くさらせたり、反抗させたりする結果になることがある。

選手の中には、くよくよと取越し苦勞する傾向のあるものと、そうでないもの、あるいは試合の始めに好調であれば、途中でつまずいても、くじけないで試合を進めることのできるものと、なにかの障害に直面すると、すぐにくじけやすいもの、あるいは、試合のときに、あがりやすいものとそうでないものがある。

このような選手の性格特性については、コーチは経験的に理解し、それによつてコーチにあつていている場合が多い。しかし、気の弱い人がかえつて、それをかくすため、気の強いような行動を示

すことがあるように、外面から観察しただけでは理解できないことが多い。

このために選手の性格特性をとらえるためには、性格テストを活用することが必要である。この場合に、現在、いくつかの性格テストがつくられており、それらを利用するのも一つの方法であるが、運動選手の性格特性をとらえ、しかもそれを直接にコーチのために役立たせることを考えると、それぞれ、いくつかの問題点をもっている。ことに、これまでの研究結果からみると、性格特性の中で、選手に対しては、情緒的な傾向性を分析的に、明確にとらえることが必要であると考えられる。この点についてみると、あるテストでは不十分であつたり、あるテストでは、実施に余り多くの時間を要したり、診断に特別な専門的な知識や技術を要したりなどの問題をもっている。

このために、とくに 運動選手の性格特性を理解する上に必要な性格テストの作成を試み、運動選手のコーチあるいは体育の指導に役立てようと意図した。

## 1. 研究 経 過

スポーツ科学研究委員会、必理部門では、昭和35年度より、`運動選手のあがりに関する研究、`運動選手の態度に関する研究、などについて研究を進めてきたが、これらの研究にあつて、矢田部・ゴルフオード性格検査やインタビューなどを用いて、選手の性格特性との関連を明らかにしてきた。この間においてさきにも述べたように、選手の理解には情緒面の傾向性を、さらに分析的に把握することの必要性が痛感され、この面について特徴をもつMMP I (Minnesota Multiphasic Personality Inventory) についての研究を進めた。

昭和36年37年度にわたつて、運動選手の性格の理解のために重要であると考えられる特性を決定、それを把握するために必要な項目を選択し、各項目について、従来の研究結果に基づいて再検討を加えて取捨選択し最終的に12の特性(尺度)および120項目を決定した。

尺度の構成、標準化の手続き、実施の結果やその解釈は以下に述べる通りであるが、まだ、今後に残された問題も多い。このテストを実際に選手の性格診断に活用しながら今後修正して、よりよいテストにする考えである。

## 2. 尺度の構成

このテストの作成に当つて、項目プールとしてMMP・I 原版(項目数550)、東大改訂版(項目数524)、矢田部ゴルフオード性格検査(項目数120)などを用い、その他の性格検査、態度調査、面接資料等も参照して、検討を進めた。その結果、運動選手の性格特性として後述の尺度を採用することにした。

それぞれの尺度に含ませる項目としては、つぎのような選択基準に基づき主としてMMP I についての東大での研究成果に準拠して考案し、

1. その項目が代表する性格特性が明確なものであること、いいかえればできるだけ多くの尺度にわたらないこと(妥当性)

2. これまでの諸研究で結果が一致していること(信頼性)
3. 精神医学的患者と一般人とで有意な差が出ていること(弁別力)

さらにスポーツマンとして、必要と思われる指導性、自発性等の項目も考慮に入れて作成した。

ただしテストの実用性を考えると検査用紙の簡便性、検査時間の短縮等が重視されるので、1つの項目で2つ以上の尺度を兼ねさせることを許して総数120項目とすることにした。

各尺度項目と質問番号およびその得点答の関係は付録1の通りである。

## 3. 標準化

### (1) 被検者

わが国のスポーツを代表する選手の大部分が大学生または大学卒業後まもない者で占められている現状から、標準化のための被検者としては都内の総合大学(国立大学・私立大学各2校計4校)、の各学部から選んだ。総数1772名のうち運動部員として活躍中の者を除き、さらに残りから無作為に1000名を抽出した。

### (2) 標準点

標準化のための被験者(一般大学生男子1000名)

の各尺度毎の平均並びに標準偏差は次のようであった。( )内標準偏差。

? 尺度 7.95 (6.00)。 L 尺度 2.33 (1.66)  
 N<sub>1</sub> 尺度 5.98 (2.99) N<sub>2</sub> 尺度 9.50 (3.78) N<sub>3</sub>  
 尺度 8.82 (4.74) N<sub>4</sub> 尺度 13.80 (5.40) D 尺  
 度 5.33 (2.80) P<sub>1</sub> 尺度 8.07 (2.71) P<sub>2</sub> 尺  
 度 7.23 (2.71) M 尺度 10.58 (4.03) A<sub>1</sub> 尺  
 度 9.40 (4.70) A<sub>2</sub> 尺度 5.02 (2.17)。

標準点を求めるのにパーセントイル法を用いた。このテストがねらいとする選手のパーソナリティーを把握するには段階も5段階が適当でありプロフィールからの診断、解釈をより容易にするもの

第1表 段階換算表

尺度	? 尺度	L 尺度	N <sub>1</sub> 尺度	N <sub>2</sub> 尺度	N <sub>3</sub> 尺度	N <sub>4</sub> 尺度	D 尺度	M 尺度	P <sub>1</sub> 尺度	P <sub>2</sub> 尺度	A <sub>1</sub> 尺度	A <sub>2</sub> 尺度
標準点	?	L	N <sub>1</sub>	N <sub>2</sub>	N <sub>3</sub>	N <sub>4</sub>	D	M	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>
1	0~4	0~1	0~3	0~6	0~5	0~10	0~3	0~7	0~6	0~5	0~5	0~3
2	5~9	2	4~5	7~8	6~7	11~12	4	8~9	7	6~7	6~8	4
3	10~14	3	6	9~10	8~10	13~15	5~6	10~11	8~9	8	9~11	5~6
4	15~19	4	7~9	11~13	11~13	16~19	7~8	12~14	10	9~10	12~14	7
5	20~	5~	10~	14~	14~	20~	9~	15~	11~	11~	15~	8~

と考へた。

各尺度とも、20パーセントail毎に区切り標準点を1, 2, 3, 4, 5として相当する粗点を第1表に示した。各尺度とも、特徴の顕著なほど標準点が高くなるようにした。

ここで注意すべきことは、結果の解釈にあつて、標準点4, 5を得たものは、顕著な性格特徴を示しているのであるから、良い面でも悪い面でも積極的な意味づけが考えられねばならないが、標準点3はあくまで平均に近いということであつて、1乃至2のものとは比べて、特徴がより顕著であると考えてはならないことである。個々の尺度についての詳しいみ方については、「結果の解釈」の章に述べるが、一般的に言えば、平均に近いことはむしろ好ましい場合が多く、平均よりも特徴が少な過ぎるのは、即ち1, 2の場合には、逆に好ましくないと考えられることがある。

被検者(一般男子大学生)の各段階への例数は第2表に示した。

### (3) 妥当性

このテストの妥当性に関しては、十分な検討の段階に到っていないが、とりあへずMMP Iと矢田部ゴルフオード性格検査の尺度のうちTSP I

第2表 一般男子大学生の各段階の例数  
(N=1000)

標準点 尺度	1	2	3	4	5
?	366	242	144	103	126
L	355	231	191	118	105
N <sub>1</sub>	225	230	141	257	137
N <sub>2</sub>	227	197	194	230	152
N <sub>3</sub>	264	164	231	163	178
N <sub>4</sub>	275	141	204	214	166
D	291	147	232	191	139
P <sub>1</sub>	297	141	264	109	189
P <sub>2</sub>	221	289	154	195	141
M	234	199	181	200	186
A <sub>1</sub>	231	202	229	187	151
A <sub>2</sub>	273	134	313	125	155

なお、検査結果の粗点が整数であるため、ある尺度では粗点の分布のし方により、段階への例数にいくらか差がある。

の各尺度と対応するものについて、43名のテスト結果から相関を求めてみた。対応する尺度間にはすべて正の相関が認められ、特にN<sub>1</sub>とH<sub>s</sub>、N<sub>3</sub>とH<sub>y</sub>、N<sub>4</sub>とP<sub>t</sub>、MとM<sub>a</sub>、A<sub>1</sub>とS<sub>i</sub>、とは、.60以上の値を得たが、N、D、P<sub>2</sub>については若干問題点が残された。

## 4. 実施の結果

### (1) 男子運動部学生と一般男子大学生との比較

2群を比較して見ると3を中心とした範囲に得点が分布されているが男子運動部学生は一般男子大学生に比較してL P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> A<sub>2</sub>がやや低くN<sub>1</sub>を除いたN尺度群と他のM<sub>1</sub> A<sub>1</sub>は少し高くなっている。

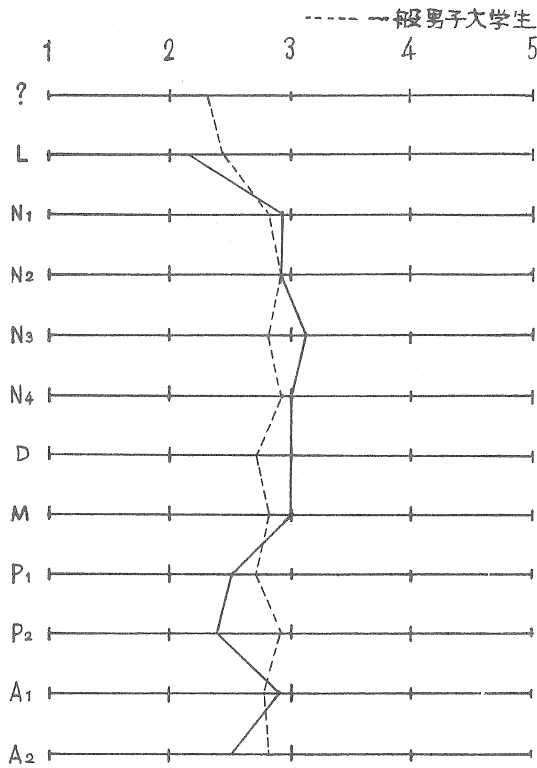
L点が高いということは被検者が回答を選ぶにあつて、自分が社会的に最もよく受け入れられ易いような立場になるような回答を選ぶ程度、すなわ実際の自分を偽っている程度を測定している妥当化得点である。L点の得点が高くて他の尺度の得点がすべて妥当でないとは限らないが、し

かし恐らくその被検者が現実に得た得点よりは本当はもつと高くなるであろうということは考えられる。

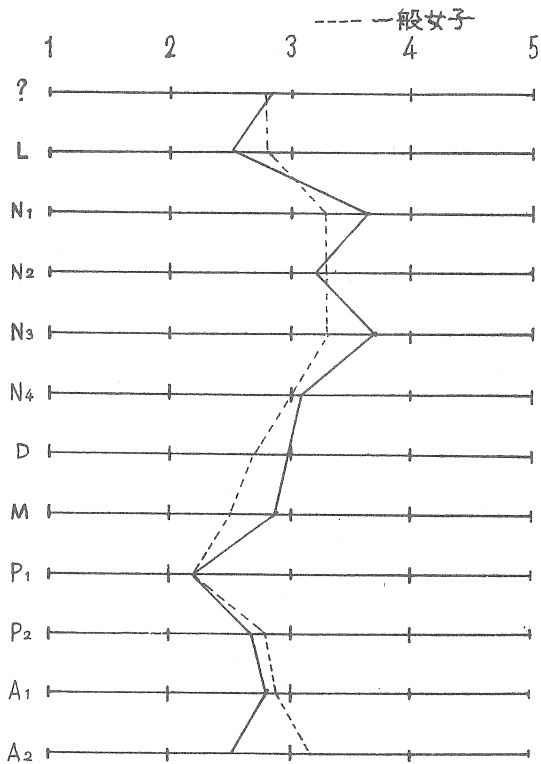
P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>が高いということは孤立自閉的傾向がある。A<sub>2</sub>が高いということは引込み思案であることを意味する。N尺度群が高いことは身体的機能に関する関心をもち神経質で線が細い傾向を意味している。Mが高いのは活動的、自発的を意味し、A<sub>1</sub>が高いのは、遠慮深く思いやりがあるが、なかなかうちとけにくい。

第2表だけでは何とも結論は得られないが男子運動部学生は一般男子大学生に比較してみせかけが少く、身体的機能に対して多くの関心をもち、活動的で協調的であるがやや神経質的傾向が強い

第1図 男子(運動部)(N=391)



第2図 女子(運動部)(N=20)



ようである。

運動部に属する学生の上記の特徴が女子にも見られるかどうか、女子一般学生と運動部学生にこのテストを実施してみた。その結果が第17表第18表および第2図である。男子と同様の特徴が女子においても見られる。

## (2) 運動種目別選手の比較

T S P I を日本代表候補選手と大学運動部学生とに実施した結果は次の通りである。第3表から第16表までは種目別に各段階の例数を示したもので、これらと一般学生との間で $\chi^2$  検定を行い、有意水準を\* 印で右側に示した。また第3図から第16図までは種目別に標準点の平均をプロフィールに示したものである。

種目別の特徴を要約すると

- ① 一般にスポーツ選手には、いわゆる線が細いタイプは少いが体操と日大のバスケット、柔道は一般学生に比べるとこの傾向の者が多い。
- ② Mが高い活動的なタイプも一般に多いが、特にバレエ、相撲に多く、これらと重量承げの三者のプロフィールは類似性がある。
- ③ ピistolとホッケーはN尺度群とA尺度群が、顕著に低い点で共通であるがこれは、? Lの得点からみてテストに対して警戒的であるためと考えられる。
- ④ 一般学生のプロフィールとはほぼ類似しているのは、日本代表のバスケット、山岳、剣道、陸上である。



これらの諸特性は、その程度によつては、一般にその傾向がみられるのである。スポーツ選手にこの傾向の一部がみられる場合、その技能水準やプレーの性質と照合し、どの特性が顕著かをたしかめねばならない。つまり、このことは特異性の長短を生かすコーチの方法を必要とする性格特性であるからにはかならない。

#### P<sub>1</sub> 考え方尺度

この尺度の得点の高い場合は、知性的な心のはたらき方の種々な特徴を表わしている。つまり、一般的な判断の誤りがあつても、自己の考え方を高く評価し、固執する傾向性をみるものである。

したがつて、スポーツ選手でこの尺度の得点の高いものは、コーチの意見に従わず、しかも曲解する傾向がある。ただし、一流の技能水準に達した選手の場合には、この特性を生かしたかなり天才的な素質の所有者であるとみなすことができよう。

但し、この尺度はTSP Iの全尺度の中でもつとも問題点の残されたものであるから、その意味、解釈を一義的に下すことの危険性を念頭におく必要がある。

#### P<sub>2</sub> 情意尺度

この尺度の得点の高い場合、感情の動きが貧困で、生活態度も消極的であり、対人関係がなんとなく冷淡、無関心である。また、決断力がにぶく、注意の集中ができにくく空想にふけるかあるいは緊張状態が表れる傾向がある。

したがつて、スポーツ・マンでこの得点の高いものは、チームゲームのメンバーの場合には孤立して非協調的な傾向がみられる。また、プレーに

さいしては心因性の緊張によつて動作の円滑さがかなり阻害されるので、とくにリラクゼーションの技術を習得させねばならない。

#### M 活発尺度

この尺度の得点の高い場合、活力にあふれ、極度に熱中し、過度に努力し、自我感情が昂揚すると、楽天的で、自信をもち、自己の才能などについて誇張的となり、反対する人にたいして斗争的となる。

このような特徴をもつたスポーツ・マンは、すぐれた選手になれる性格特性の持主であり、活動的、積極的でねばり強いプレーする人が多い。

#### A<sub>1</sub> うちとけない尺度

この尺度の得点の高い場合は、対人接触をさげるかあるいは円滑な交際がしにくい性格特性をあらわしている。これは、劣等感・神経質・不活発などの二次的なあらわれであるといえよう。

この得点の高いスポーツ・マンは、この性格的な欠陥のために、持てる能力を十分に発揮できぬ傾向がみられる。したがつて、対人競技において成功するには、他のメンバーとうちとけるように努力せねばならない。

#### A<sub>2</sub> 引込み思案尺度

この尺度の得点の高い場合、つねに卒先して行動する能力や、人の扱い方や仕事の処理などの統率力の程度がかなり欠けていることを表わしている。

したがつて、この得点の高い選手をコーチする場合は、とくに、具体的な練習目標や役割をあたえるよりも、自主的に計画できるように指導することが必要である。

## 5 妥 当 性

このテストの妥当性については、十分な検討の段階に到っていないが、とりあえずMMP Iと矢田部・ギルフオード性格検査の尺度のうち、T S P Iの各尺度と対応するものについて、43名のテストの結果から相関を求めてみた。対応する尺

度間にはすべて正の相関が認められ、特に  $N_1$  と  $H_s$ ,  $N_3$ と  $H_y$ ,  $N_4$ と  $P_t$ ,  $M$ と  $Ma$ ,  $A_1$ と  $S_i$  とは0.60以上の値を得たが、 $N_4$ ,  $D$ ,  $P_2$  については、若干問題点が残された。



